

対象への物理的接触・接近が単純接触効果に及ぼす影響

出原 里紗

単純接触効果とは、単なる接触によって対象への評価がポジティブに変化するという現象である。これまで好ましさの知覚については様々な側面から議論されてきたが、好ましさの決定に影響を与える要因について、評価対象以外の要因を組み合わせた実験はほとんどされてこなかった。そこで本研究では視覚からの情報がある上で物体に触れて印象が形成されるという日常的な場面を考慮して視覚と触覚のマルチモーダルな単純接触効果の検討を行った。本研究は視覚情報に触覚情報が加わることによる単純接触効果への影響の検討を目的とした。また、接近行動そのものが好意度を上昇させることが知られていることから、接近行動と単純接触効果の関係について検討することを目的とした。

本実験では自然の石を刺激として用い、触らずに見る条件、持ち上げずに触る条件、垂直に持ち上げる条件、持ち上げて自分のほうに引き寄せる条件の4条件の接触方法で刺激と接触し、1回目の接触後と5回目の接触後に、それぞれ刺激の好ましさをビジュアルアナログスケール(VAS)という手法を用いて評価した。本研究では視覚-触覚間のマルチモーダルな単純接触効果は視覚単一の単純接触効果よりも好意度を上昇させると仮定を検討した。また、視覚-触覚間のマルチモーダルな単純接触効果の中でも物理的接触・接近の段階によって好意度上昇効果に変化するという仮説を立てた。

実験の結果、接触回数が増えることによる好意度の変化は参加者によって異なっており、視覚のみの接触と比較して物理的接触がある条件で好意度が上昇する場合と低下する場合があることが示された。物理的接触が単純接触効果にポジティブな影響を与えた参加者(+群)は視覚のみの接触よりも視覚-触覚のマルチモーダルな接触でより好意度が高くなった。また接近行動は単純接触効果の好意度上昇に加算的に働かなかったが、接近行動を伴う接触方法において刺激に関する記憶があるほど好意度が上昇した。物理的接触が単純接触効果にネガティブな影響を与えた参加者(-群)は接近行動を伴う条件で他条件よりも好意度が高くなった。

以上の結果から+群では接近行動とポジティブ評価プロセスの活性化との間には顕在記憶が関係している可能性が示された。一方、-群は接近行動による好意度の上昇は提示回数が少なくても発生しやすいことが示唆された。これらの結果から+群と-群の差異は、接近行動によるポジティブ評価プロセスの活性化の生じやすさの違いが影響していると考えられる。(応用認知心理学)